

## 個人レポート

### 『古今和歌集』——四季歌の中の恋——

境 祐 希

#### 一 はじめに

題しらず

読人しらず

17春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

右は、『古今和歌集』（これ以降『古今集』とする）「春歌上」にあげられている歌である。<sup>①</sup>

『古今集』は、一一一首採入されており、「四季歌（春上・春下・夏・秋上・秋下・冬）」「賀歌」「離別歌」「羈旅歌」「物名」「恋歌（一～五）」「哀傷歌」「雑歌（上・下）」「雑躰歌」「大歌所御歌・神遊びの歌・東歌」の二十巻の構成からなる。その中でも収載されている歌の数が一番多いのは、「四季歌」と「恋歌」である。『古今集』の撰者は紀貫之を含め四人いるが、『古今集』の「仮名序」を書いたとされていることから、紀貫之が中心となつて編纂したと考えられている。

右の一七番歌は、「春日野の番人よ、せめて今日だけは春日野を焼かないでくれ。わが愛する妻も、私もこの野に隠れているのだから。」という現代語訳がつけられており、この訳から、この歌は恋歌として捉えることができる考えた。恋人を示す「つま」と、「こもれり（隠れて

いる）」という言葉から、せつかく恋人と一緒に春日野に来ているのだから、今日ばかりは誰にも見つからずに一緒にいたい、という内容を読み取ることができる。

また、『伊勢物語』に「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」と、『古今集』一七番歌と類似の歌が見られる。<sup>②</sup>『伊勢物語』の中では、男が人の娘を武蔵野へ連れていくと、国守に盗人だと捕らえられてしまい、男はその娘を叢の中に置いて隠れた。そこで国守は野に火をつけようとする際に、その娘が詠んだ歌という設定になっている。

以上の理由から、この十七番歌は恋歌として解釈することができる。しかし、なぜ『古今集』の中では、「恋歌」ではなく「四季歌」に採入されたのだろうか。また、撰者たちは、どのようにして「四季歌」、「恋歌」と分けたのだろうか。

鈴木宏子氏は、「四季歌」の編纂について、紀貫之自作の歌がどこに採入されていることを指摘し、

紀貫之は和歌の〈型〉についての認識を深め、みずからの歌によってそれらに洗練の度を加え、さらには新しい〈型〉を切り拓いた。そのような彼の歌を不可欠な要素として、かくあるべき『古今集』

が形づくられていった。

と述べている<sup>(4)</sup>。春歌であれば、十二月から早くも春がやってきたという歌から始まり、梅が咲き、鶯が鳴き、春の野原の情景、桜、そして春の終りで季節が夏に移り変わっていくことを詠んだ歌で締めくくられる。ここから、撰者たちが「四季歌」で時間的流れという〈型〉を意識しながら歌を並べていることがわかる。

また、「恋歌」の編纂について、鈴木宏子氏は、紀貫之自作の歌が「四季歌」に比べると「恋歌」では少ないことを取り上げつつ、紀貫之の描いた〈型〉があることを考え、

万葉相聞歌以来の心象表現の〈型〉を意識しつつ『古今集』にふさわしい恋歌を創り上げている。また『古今集』よみ人知らず歌の中に芽生えた新しい動きを捉えて、それをみずからの歌において精錬し定着させている。

と述べている<sup>(5)</sup>。『古今集』の「恋歌」は、『萬葉集』に入っている家持の長歌を基にしている歌から始まり、撰者たちの人生観を込めたであろう歌で恋歌が締めくくられている。このことから、『古今集』が成立した時代の和歌の在り方から、当時の考え方を取り入れるように歌が並べられていることがわかる。

恋歌であれば、「君」や「命」など、人の身に近い言葉や、「恋しき」「忘れなむ」などの感情が多く出てくるため、撰者たちが「恋歌」と判断したことも納得ができる。また「四季歌」でも、「月」「夕暮れ」など、風景を表す時に使われる言葉から、「四季歌」として捉えることができる。しかし、「四季歌」の中には恋歌としても読み取ることができる歌が存在する。歌物語の『伊勢物語』は男女の恋の話で有名だが、『古今集』の四季に採入されている歌と似ている歌が多くある。また、主人公の光

源氏と数々の女たちとのやりとりを描いた『源氏物語』でも、『古今集』の「四季歌」中のものを採っている場面がよく見られる。

そこで本稿では、『古今集』の「四季歌」に着目する。その中でも、恋の要素を含む歌と考えられる和歌を取り上げ、「四季歌」の特徴を検討する。

なお、ここで使用する『古今集』の引用本文、歌番号は、『新編日本古典文学全集11』による。

## 二 「四季歌」全体部分から見た恋

「四季歌」は全部で三四二首ある。その中で、恋としても捉えられると考えた和歌を表（次頁）にまとめた。

春歌では、一三四首中、約二十一パーセント、夏歌では、一一三首中、約八パーセント、秋歌では、一四四首中、約二十四パーセント、冬歌では、二八首中、約七パーセントが恋として考えられた。

なお、ここで四季歌の中から恋として選ぶために用いた基準を示したい。

(ア) 和歌中に人称代名詞が含まれている。

(イ) 和歌中に「待つ」や「恋」、「思ふ」という語が含まれている。

(ウ) 掛詞で心情に関する意味でも取られる語が含まれている。

(エ) 『伊勢物語』など他作品で類似の和歌が見られる。

(ア) について、「四季歌」中には「君」「わがせこ」「汝」など、人を表す語が含まれている歌が存在する。「恋歌」の中には、

季節	春	夏	秋	冬
恋と詠める歌の数	二九	一一	三四	二
歌番号	一七・二一・二五・三三・三四・三五・三七・三八・六一・六二・六三・六四・六七・七四・七八・八三・九二・九六・九八・一〇〇・一〇一・一〇四・一〇七・一一八・一一九・一二三・一三一・一三二・一三三	一三九・一四三・一四五・一四六・一四七・一四八・一四九・一五五・一五八・一六二・一六七	一七三・一七四・一七五・一七六・一七七・一七八・一七九・一八〇・一八一・一八二・一八三・一八八・二〇〇・二〇二・二〇三・二一一・二一九・二二〇・二二一・二二六・二二八・二二九・二三〇・二三一・二三五・二三六・二三八・二四〇・二四三・二四七・二五四・二六八・二七七・二八五	三二七・三三八

春日祭にまかれりける時に、物見にいでたり

ける女のもとに、家を尋ねてつかはせりける

478 春日野の雪間をわけておひいでくる草のはつかに見えし君はも

(恋一・四七八・壬生忠岑)

のように、その場で見られる情景を見て詠みつ、相手(恋人)のことを思う歌が見られる。四季歌にもそのように読み取れる歌も存在するため、恋として捉えることも可能であると考えた。

(イ) は、恋歌で頻繁に出てくる語である。

(ウ) について、

寛平御時後の宮の歌合の歌

101 咲く花はちくさながらにあだなれど誰かは春をうらみはてたる

(春下・一〇一・藤原興風)

隣より、常夏の花をこひにおこせたりければ、惜しみてこの歌をよみてつかはしける

167 塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝るとこ夏の花

(夏・一六七・凡河内躬恒)

一〇一番歌は、咲く花が「あだ(散りやすい)」なことと、人の心も「あだ(移りやすい)」と掛けている。また、下句で「誰かは春をうらみはてたる(そのような春に、恨みを言える人はいらるうか。)」と、人が心変わりすることがわかっていても、それをなかなか受け入れられない気持ち混ざっている。ここから、恋心を詠った歌であるといえよう。

一六七番歌について、「とこ夏の花」は撫子の花の異名であるが、ここで『歌ことば歌枕大辞典』で和歌における使われ方を確認する。

① いつも夏であること。また、夏のように暑いことのたとえ。

② 「とこなつに」で、夏の季節を通してずっと。また、毎年の夏に。

一説にいつも変わらず、とこしえにの意とも。

③ 多く「床」が掛けられる。

④ 常夏のような女性という意の「撫子」と「夏の間ずっと」の意を掛ける。

⑤ 愛する人の象徴、永遠なるものの象徴。

⑥ いつも親しめる感じであるという「常懷」の掛詞として使われることもある。

とある。<sup>(6)</sup>「常に」ということから時間的に長く感じられ、また「大和撫子」というように、美しい女性をイメージすることができ「とこ夏」は、恋として連想できることがよくわかる。

一六七番歌の詞書を見ると、隣の人が常夏の花を欲しがっているが、花をあげるのが惜しかったため、歌を贈ったとある。花をあげることを拒んでいた理由として、「妹とわが寝るとこ夏の花」とあり、「共寝をする所(床)」が考えられ、その花を大切にしていることがわかる。

(エ)について、最初に紹介した「春日野は…」の歌(一七番)のように、「四季歌」の中には、『伊勢物語』中にも出てくる歌が存在する。

以上より、大まかに基準を説明したところで、続いて各季節歌について述べていく。

まず春歌について考える。恋歌として読み取れる歌によく含まれる語は、「梅の花」、「桜花」である。「梅の花」は、ついつい立ち止まってしまつような香りを放つ花であり、当時の人々も「香り」といえば「梅の花」

を連想していた。また袖に梅の香りが移ることから、「心移り」の意も掛けることができる。さらに「梅」について、『和歌植物表現辞典』では、『源氏物語』「紅梅」巻を例にとり、「紅涙の比喩としてもうってつけの素材」とされた。白梅に比べ紅梅の方が恋歌中に多用されているのも頷けよう<sup>(7)</sup>と説明されている。以上から、「梅の花」は恋歌になる要素が多分にある語である。

次に夏歌について考える。夏歌のほとんどは、「郭公(時鳥)」が入っている。「郭公」は時を知らせる鳥として有名であるが、その鳥が鳴くのを聞いて時間が経っていることを認識させられ、昔を恋しく思うことから、恋として捉えられる歌もあると考えた。

続いて、秋歌について考えたい。秋歌は「天の河」「萩」「女郎花」という語が含まれている歌が、特に恋歌と捉えられやすい。「天の河」というと織姫と彦星を想像するであろう。二人が一年に一度しか会えないという七夕の日に、二人の気持ちを考えながら詠んだ歌がここに採入されている。また、和歌で詠まれる「萩」について、『日本国語大辞典』では、

特に鹿や露との組み合わせは多く、鹿が萩に親しむさまを「あきはぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさへよみ人しらず」(古今・秋上二二七)などと歌い、「鹿の妻」「鹿鳴草」などの異名も生まれた。一方、露は、萩の枝をしなわせるありさまや、露による花や葉の変化などが歌われ、また、「涙」の比喩ともされ、「萩の下露」は、「萩の上風」と対として秋の寂寥感を表現するなどさまざまな相をもって詠まれた。

とある。<sup>(8)</sup>萩の葉の変化や、葉に付いた露からの連想が、人の感情も歌の中に入れていることがわかる。「女郎花」については、漢字の「女」と

いう部分から、女性を表現でき、恋を感じることができる。

最後に、冬歌について考えていきたい。ここでは、「おとづれ」が恋を連想させることができると考えた。冬は寒さが厳しく、雪も降るため、人の訪れが少ない季節である。自分のいる場所から外を眺めつつ、人の訪れを待っている様子が想像でき、人恋しさが伝わってくる。

この部分では、四季歌の中から恋と捉えられる歌を抽出する際に設けた基準と、季節ごとに見られる言葉から恋の要素として読み取れる言葉を示した。

表から、「四季歌」の中でも春歌と秋歌が恋として読み取れる歌の数が多かった。これについては、春や秋は植物が多いため、恋の要素も高くなると考えた。

次の章で春歌と秋歌を見ていきたい。

### 三 春・秋歌中に見られる恋

ここでは、春歌と秋歌の中で恋歌とも解釈できる歌を紹介する。

仁和の帝、親王におましましける時に、人に

若菜たまひける御歌

21君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

(春上・二一・光孝天皇)

詞書には、帝が親王であったとき、相手に若菜を贈る際に添えられた歌だと書かれている。「君がため」と「わが衣手に雪は降りつつ」から、雪が降っているために手がかじかむが、あなたのために摘むという、大切な人への思いが読み取れる。

梅の花を折りて人におくりける

38君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる

(春上・三八・紀友則)

「この梅の花を、あなたでなければ誰に見せようか。」から、美しい梅の花を贈る相手のことを強く想っていることがわかる。

桜の花のさかりに、久しくとはざりける人の

来たりける時によみける

62あだなりと名にこそたてれ桜花年まれなる人もまちけり

(春上・六二・読人しらず)

返し

63今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

(春上・六三・在原業平)

六二番歌は、桜の花が満開になる頃、長いこと訪ねて来なかった恋人へ詠んだ歌である。自身が浮気者であることを認めているが、それでも相手を待っていたという、女性側の強い歌である。それに返歌する六三番歌も、今日自分が来なかったら明日は悲しんでいたであろう、と自分に自信があるような詠みぶりで、贈答歌の基本の型にはまっている。

移ろへる花を見てよめる

104花見れば心さへにぞ移りける色にはいでじ人もこそ知れ

（春下・一〇四・凡河内躬恒）

色あせた花を見て、自分の心もその花のように移り変わってしまったことを詠んでいる。表向きでは花について詠まれているが、裏では男女の内面を伝えている。

題しらず

176 恋ひ恋ひて逢ふ夜は今夜天の河霧立ちわたりあけずもあらなむ

（秋上・一七六・読人しらず）

七夕の時に詠まれた歌である。一年に一度しか逢うことのできない特別な日であるが、好きな人といつまでも一緒にいたいという気持ちがよく込められている。

朱雀院の女郎花合によみて奉りける

230 女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらむ

（秋上・二三〇・藤原時平）

「女郎花」を女性と捉えて詠まれており、女郎花が風にうちなびいている様子と、女性が一人の男になびいている様子が掛けられている。

藤袴をよみて人につかはしける

240 やどりせし人の形見か藤袴わすれがたき香にほひつつ

（秋上・二四〇・紀貫之）

「藤袴」は、『日本国語大辞典』『語誌』に、「香り高さと、袴に懸けてその香り高い袴の主をゆかしく思うところを詠んだ例」が多い。とある。<sup>⑨</sup>作者は、藤袴を見て香りを連想し、「形見」や「わすれがたき香」と詠み、家に来た恋人のことを強く想う気持ちを訴えた。

題しらず

254 ちはやぶる神奈備山のもみぢ葉に思ひはかけし移ろふものを

（秋下・二五四・読人しらず）

「もみぢ」は、『新編日本古典文学全集Ⅱ』で「女性を遠回しにいったもの」と解説されており、<sup>⑩</sup>また『歌ことは歌枕大辞典』で「心移ろいの象徴」とある。<sup>⑪</sup>「思ひはかけし」と言っているが、「移ろふものを」と、葉の色も心も変わってしまうものであると読んでいる。

題しらず

285 恋しくは見てもしのばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

（秋下・二八五・読人しらず）

「しのぶ」は、『日本国語大辞典』に「過去のことや離れている人のことなどをひそかに思い慕う。思い出してなつかしむ」とある。<sup>⑫</sup>ここでは、山おろしの風が落葉を舞わせている様子を見て、楽しかった頃の記憶を思い出したため、「な…そ」で風に紅葉の葉を吹き散らしてほしくないことを強く訴えている。

以上、春歌、秋歌それぞれの和歌を取り上げたが、どちらも花が色あ



せる様子や香が移る様子と、人の心変わり（心移り）を掛けて詠まれることが多いとわかる。

恋歌として解釈できる歌の中でも、春と秋それぞれの特徴として、春歌では、歌が詠まれた時の風景を絡めつつ、恋の要素を入れているが、秋歌では「天の河」や「女郎花」のように、言葉そのものが持っている恋の要素を生かしていることが挙げられる。

#### 四 『古今集』における四季歌について

本稿では、『古今集』の「四季歌」の中から恋歌として読み取ることができる歌について取り上げた。その中でも、第二章の表に記したように春歌や秋歌が特に恋歌として解釈できる割合が高かった。

第三章では、春歌と秋歌中の恋として読み取れる歌を取り上げたが、春と秋とで同じように「色あせる」と「心変わり」が掛けられていても、秋の方が、女性に例えられるものが多く、歌全体が恋の訴えに捉えやすい傾向にある。

以上より、『古今集』「四季歌」の中でも、恋歌として解釈できる歌の割合は、春歌も秋歌もほとんど変わらないが、秋という季節そのものが恋の要素を持ちやすいと結論付ける。

なお、筆者たちはどのようにして「四季歌」と「恋歌」とを分けたのかについては、今後の課題にしていく。

#### 注・参考文献

- (1) 小沢正夫、松田成穂校注・訳『古今和歌集』（『新編日本古典文学全集 11』小学館・一九九四年）
- (2) (1) に同じ。

- (3) 福井貞助他校注・訳『伊勢物語』（『新編日本古典文学全集 12』小学館・一九九四年）

- (4) 鈴木宏子『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語―』（笠間書院・二〇一二年）

- (5) 鈴木宏子「紀貫之の恋歌―歌集編纂と作歌―」（『千葉大学教育学部研究紀要』第六十巻・二〇一二年）

- (6) 久保田淳他編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・一九九九年）

- (7) 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版・一九九四年）

- (8) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』（第二巻・小学館・一九七三年）

- (9) (8) に同じ。

- (10) (1) に同じ。

- (11) (6) に同じ。

- (12) (8) に同じ。